



Midori Mibu

手作りならではの 楽しみを伝えたい

清流、四十万川流域の産品を包装するのに相応しい、自然に優しいラッピング素材として、地元のある女性が発案した「四十万川新聞バッグ」。新聞紙と糊だけで仕立てたものながら、思いのほか丈夫で、しかも新聞紙面の写真・広告の活かし方しだいでさまざまな色・絵柄が作り出せる。エコロジーな感覚と実用性、そして独特の美しさを備えていることから、欧米の美術館やファッションブランドなどからも一目置かれ、もはやアートの一分野として認められている。

壬生みどりさんは、岡山では数少ない四十万川新聞バッグの公認インストラクターとして、その魅力を多くの人に伝えている。

●「ものづくりに」が何より好き

もともと手先が器用で、ものづくりが趣味だった壬生さん。四十万川新聞バッグに出会う以前から、身近な草木や小石、和紙や古布などを使っただけのクラフトを楽しんでいた。また「娘達とプレゼントを贈り合うのが大好きで、娘からもらったプレゼントの包装紙を再利用してかわいい小物を作って贈り返すなどして楽しんでいました」と話す。最初に新聞バッグを見つけたのは娘さんで、「新聞紙でバッグが作れるん



だつて」と写真を見せてもらった時にとっても感動して、すぐに「作り方を習いたい」と高知県まで車を走らせましたと笑う。何よりものづくりを愛し、そしてフットワーク軽快な壬生さんらしいエピソードだ。

●人に教えるからには責任を持ちたい

そうした壬生さんだが、現在では公民館やふれあいセンター、福祉施設などに請われボランティアとして講座で指導する機会も多い。また新聞バッグの他にも、麦稈真田、草木を使ったオーナメント、ラテアートなど、レパートリーも多彩だ。しかも例えばラテアートの講師を務める際は、「材料代などお金を頂戴するからにはプロだから」と、食品衛生責任者の資格を取得して臨むほどの徹底ぶり。これまでに壬生さんは、実に多くの資格を取得してきたという。

●親子で楽しめるエコ・クラフトを

新聞バッグをはじめ、数々のものづくりを手がけ、また講師のボランティア活動を通じて、人とのふれあいを楽しんできた壬生さん。今後の展望をたずねると、「子育て中の若いお母さん達へ、身近なものを使って子供と一緒に楽しめるような手作りの玩具やクラフトのアイデアを伝えたいですね」と意欲を見せながら目を細める。

壬生さんは、今日もどこかのコミュニティで、ものづくりの楽しさを伝えているかもしれない。興味を持った方は、公民館等の講座情報で壬生さんの名前がないかぜひチェックをおすすめしたい。

壬生みどりさん

四十万川新聞バッグ
インストラクター